

## 万葉集の「今夜」・「明日」について

### On “Koyoi” and “Asu” in the *Manyoshu*

稲岡耕二\*

In the tale of the visit to the Sea god's palace, in the *Kojiki*, the Sea god asks his son-in-law Howorinomikoto, “This morning my daughter tells me, ‘The three year's he has spent here he has never sighed, yet last night [*koyoi*] he sighed greatly.’ What might be the matter?” In fascicle 17 of the *Kojikiden*, Motoori Norinaga comments on the word *koyoi* (lit. “This night”) in this passage, glossing it as “last night,” and cites similar instances of the use of the word *koyoi* in the *Fudoki*, the *Isemonogatari*, the *Genjimonogatari* and the Diary of Izumishikibu. In short, Norinaga points out that the term *koyoi* is frequently used to refer to the night before the present day, in texts from the Nara through the Heian periods. Although Norinaga does not speak of the mentality underlying this special use of the term, Minakata Kumakusu, in a paper on popular conceptions of the day in ancient times (contained in volume 4 of his collected works), cites a surviving dialectical usage from the Kishu area (use of “last night” to mean “the night before last”), and suggests that at least through the Tenji era in Japan, as in Turkey and elsewhere, the day

---

\* INAOKA Kooji 東京大学教授

was thought of as beginning at sunset. Further examples of the usage cited by Norinaga appear in the *Heikemonogatari* and the *Konjakumomonogatari*, and from instances in the latter, it can be inferred that at the time *Konjaku* was composed, the day was variously calculated as beginning at sunrise, sunset and midnight. There is similar evidence in the *Manyoshu*, and the problem has been treated by Ide Itaru. The present paper will consider such usages in *Manyoshu* songs dating from a relatively early age.

### 一、海神宮訪問譚の「今夜」

古事記神代巻に火遠理命の海神の宮訪問譚が載っている。そこに、次のような箇所がある。

是に、火遠理命其の初めの事を思ほして大きな嘆きしたまひき。故、豊玉毗売命其の歎きを聞かして其の父に白して言ひしく、「三年住みたまへども、恒は歎かすこともなくありしに、今夜大きななげきしたまひき。若し、何の由かある」。故れ其の父の大神其の聳夫を問ひていひしく、「今旦、我が女の語るをきけば、三年坐せども恒は歎かすこともなかりしに、今夜大きな嘆きしたまひしといひつ。若し由有りや」<sup>(注1)</sup> (下略)

上の海神のことばのうち、「今夜」について、記伝には次のように説かれている。

今夜は昨夜を云るなり、此は次の父神の言に、<sup>けき</sup>今旦云々とあれば、御歎を聞賜ひし、<sup>ツトメテ</sup>明朝の詞なればなり、其夜明て後も、なほ今夜と云こと、津ノ國ノ風土記、夢野ノ鹿ノ事を記せる処に、<sup>ツトメテ</sup>明旦、牡鹿語リ其嫡ニ云ケラク、今夜夢ニ吾ガ背爾雪零於祁利止見支、伊勢物語に、今夜夢になむ見え給ひつると云りければ、源氏物語野分ノ巻、野分せし<sup>ツトメテ</sup>明旦の詞に、今夜の風とあり、和泉式部物語に、いたく零明して、<sup>ツトメテ</sup>明旦、今夜の雨の音は云々」(記伝巻一七)

つまり一夜明けてのちに前晩のことを「今夜」と称することが奈良時代から平安時代にかけて多く見られる点を、宣長は指摘しているのである。ただ、こうした「今夜」の用法の見られる理由や背景につき、宣長は何も語っていない。

南方熊楠の「往古通用日の初め」<sup>(注2)</sup>によると、紀州の田辺地方にも一昨夜をキノノバンとすることがあり、それは、天智天皇時代以前のわが国において、トルコ等と同じく、日没を通用日の始まりとした遺習だろうかと考えられている。少し長いが引いておこう。

……紀州和歌山等多くの地で、昨夜をヨンベ(ユウベ)、一昨夜をオトツイ(オトイ)ノバンと言ひ習わし、田辺地方では昨夜をヨンベまたユウベと呼ぶにかりはなけれど、一昨夜をキニョオノバン(昨日の晩)という人が多い。京阪、和歌山などの人には、昨夜とのみ解せらるべければ、不便少なからずと、毎々拙妻等を叱正しても一向直らぬ。いかにもヘンなことで多年怪しみおったところ、昨夜ふと『今昔物語』を繙くに、31巻10語、尾張に住んだ匂経方という男が、国府へ召されたと妻を欺き、情婦を訪うて共に臥し、采戦数番にして疲れ眠った。夢に本妻来り罵り、二人が中に入り、妨げ騒ぐとみて覚めた。怪しみ怖れて帰宅し、夜明けてのち妻をたばかり詞に、「今夜御館に事の沙汰どもありて、とみにえまかり出でずしてねざりつれば、苦しきこと限りなし」とある。これを聞いて妻のいわく、「おのれはつれなき者かな、今夜正しく女のかの許に行きて、二人臥して愛しつる顔よ」と言え、誰がそう語ったかと問うた。妻答に、「夜前出で行きにしに、必ずそこへぞ行くらむと思ひしに合わせて、今夜の夢に、あの女の許にわが行きたりつれば、おのれはその女と二人臥して、万を語らいつるをよく聞きて(中略)引き妨げたりつれば、女もおのれもたち騒ぎてこそはありつれ」と述べた、と出づ。夜明け後この対話をしたと本文にあれば、正しく昨夜と言うべきを、今夜と三度まで夫妻が言ったを考う

るに、今も田辺で一昨夜を昨日の晩と言うに等しく、平安朝時代に尾張等で昨夜を今夜（今日の夜）と呼んだのだ。夜前とは宵の内を意味したらしい。これ天智帝御宇前の本邦で、トルコ等と同じく、日没を通用日の初まりとした遺習だろうか。（後略）

宣長のあげた例のほかにも、平家物語や今昔物語にも見える。それらを通して、今昔物語当時の一日の起算の仕方には、夜半午前零時をもってする方法と、日の出を一日の始めとする方法と、日没を一日の始めとする方法との三通りがあったことも推定されている。

## 二、人麻呂以前の万葉歌の「今夜」「明日」

万葉集に関しても、同様なことが考えられる。すでに井手至、<sup>(注3)</sup> 神野志隆光<sup>(注4)</sup> の両氏の論もあるが、ここでは、それらの驥尾に付して、万葉集の比較的古い用例について検討してみたいと思う。

下に掲げたのは、初期万葉から人麻呂の時代にかけての「今夜」「明日」の用例である。

暮されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずいねにけらしも（1511） 岡本天皇  
わたつみの豊旗雲に伊理比弥（沙）之今夜の月夜清明己曾（15） 中大兄皇子  
飛鳥川なづさひ渡り来しものをまこと今夜は明けずもゆかぬか（2859）

人麻呂歌集

吾が恋ふる丹のほの面輪今夜もか天の河原に石枕巻く（2003） 人麻呂歌集  
天の川梶の音きこゆ彦星と織女と今夕あふらしも（2029） 人麻呂歌集  
なぐさめて今夜は寝なむ明日よりは恋ひかもゆかむこゆ別れなば（1728）

石川卿

み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我がひとり寝む（74） 文武天皇  
大原のこの市柴の何時しかと吾が念ふ妹に今夜あへるかも（513） 志貴皇子

× ×



……神岳の 山のもみちを 今日もかも 問ひたまはまし 明日もかも  
めしたまはまし…… (159) 持統天皇

うつそみの人なる我や明日よりは二上山をいらせと我が見む(165) 大伯皇女  
風吹きて海は荒るとも明日と言はば久しくあるべし君がまにまに (1309)

人麻呂歌集

今朝去<sup>ゆ</sup>きて明日には来ねと言ひし子を朝妻山に霞たなびく(1817) 人麻呂歌集  
高麗錦紐のかたへぞ床に落ちにける明夜し来なむと言はば取り置きて待た  
む (2356) 人麻呂歌集

明日香川明日だに見むと思へやも我が大君の御名忘れせぬ (158) 人麻呂

これらの中には日没を一日の始まりとする意識によるか、そうでないか、  
明確にし難い例が含まれている。むしろ、その類が多いのである。「今夜」の  
例で言うと、1511の岡本天皇の御製歌「暮されば……今夜は鳴かず」は、「今  
夜」そのものにおける作歌だから、どちらに属するか判断しかねるし、文武  
天皇御製の「はたや今夜も」も、志貴皇子歌の「今夜あへるかも」、石川卿の  
「今夜は寝なむ」なども同様である。

つまり初期万葉から人麻呂の時代にかけての歌の「今夜」には、明瞭にそ  
の意識を確認しえないものが大部分で、人麻呂歌集の三例も例外ではない。  
なお、中大兄の15番歌は、本文および訓読に問題のある作なので、後廻しに  
しよう。

それでは「明日」はどうかと言うと、こちらも、明確にしにくい例が少な  
くない。持統天皇の「明日もかも めしたまはまし」や大伯皇女の「明日よ  
りは二上山をいろせと我が見む」など、決定し難い「明日」である。人麻呂  
作歌の「明日だに」も、この歌のみでは答えを引き出すことができない。

ただし、人麻呂歌集の「今朝去<sup>ゆ</sup>きて明日には来ね」の場合は、男女の後朝  
の別れを詠んでいるらしい上に、「今朝」の時点で「明日」といっているの  
で、作者の一日に関する意識を探ることが可能である。

この歌の、第二句の訓は、註釈書によって多少相違があるが、アスニハコネと訓むのが正しいだろう。

本文は、写本によって相当に文字の異なる所がある。元暦本では、  
今朝去而明日者来<sup>・</sup>年等云子<sup>・</sup>庶旦妻山丹霞霏霏  
となっているが、西本願寺本や紀州本等では、

今朝去而明日者来<sup>・</sup>牟等云子<sup>・</sup>鹿旦妻山丹霞霏霏  
である。第二句と第三句に違いが見られるが、二句目は注釈に説くように、  
元暦本の「来<sup>・</sup>年等」によってアスニハコネと訓むのが正しいと思う。<sup>(注5)</sup>

第三句を、元暦本には「去子<sup>・</sup>庶」としている。これは、同じ元暦本に巻十三・3335歌の「塞道<sup>・</sup>麻」を「塞道<sup>・</sup>庶」としているのと同様、「云子<sup>・</sup>麻」の誤写であろう。原本に「云子<sup>・</sup>麻」とあったものが元暦本で「云子<sup>・</sup>庶」となり、西本願寺本・紀州本などには「云子<sup>・</sup>鹿」とされ、さらに「丹」も加えられたのである。

人麻呂歌集には訓仮名「<sup>マ</sup>麻」の例が、  
黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯<sup>・</sup>麻見れば悲しも（1796）  
にも見え、「磯を」と訓まれる。「云子<sup>・</sup>麻」もイヒシコヲに違いない。ヲは詠嘆の助詞であろう。

「麻」を訓仮名とし、助詞「ヲ」の表記とすることは平安朝の人々には理解しがたかったとみえ、元暦本の別提訓にも「しかすかに」となっている。そうした訓によって「子<sup>・</sup>麻」は「子<sup>・</sup>鹿丹」と誤写されていったようだ。

元暦本の本文を手掛かりとして、「今朝去きて明日には来ねと言ひし子を朝妻山に霞たなびく」と訓むことが可能である。とすると、後朝の別れののち、朝妻山を見ながら、「今朝はお帰りになって、明日またきつと来て下さいね」と言っていた女のことを思い出している歌だと解されよう。「朝妻山」という山の名から、朝の妻を連想し、後朝の女性を思い出している若い男の歌なのである。

右のように解すると、この「明日」は現在普通に言う明日のことではなく、

その日の日没以後を指す「明日」となる。そうでないと、「今朝去きて明日には来ね」にこめられている離れがたい思いは伝えられず、間のびした一首になってしまうだろう。

もう一首、人麻呂歌集旋頭歌の例、

高麗錦紐の片方ぞ床に落ちにける明日の夜し来なむと言はば取り置き待たむ（2356）

の場合も、「明日」で今晚をさしている例に違いない。男の衣に着けられている高麗錦の紐の片方が床の上に落ちているのを見つけた女性の歌で、「明日の夜きつと来るとおっしゃるなら、（その時に着けようと思いますので）このまま私がおあずかりしておいてお出でを待ちましょう」の意と解される。この場合も「明日の夜」を普通の明日として受けとったのでは、男女の間の濃密な感情は失われるし、「取り置き待たむ」にこめられた、待ちこがれる気持も消えてしまうのである。

人麻呂歌集には、略体歌に、このほか、

風吹きて海こそ荒るれ明日と言はば久しくあるべし君がまにまに（1309）もあるが、これは判定ができない。

初期万葉から人麻呂の時代にかけての「今夜」「明日」について、日没を一日の始まりとする意識の確かめられる例、そうでない例を探して見た。大部分は判断の不可能な用例であったが、人麻呂歌集の中に、日没以後を「明日」と呼んでいる確かな例を見出すことができた。

旋頭歌の場合は地名を含まないが、短歌には「旦妻山」の山名を見る。恐らく奈良県御所市の朝妻ではないかと言われる。とすると、「今朝去きて明日には来ね」の歌はそのあたりに住む男性の歌ということになるう。

人麻呂歌集の非略体歌は天武朝から持統朝にかけての作品であろうと考えられているから、そのころの大和の歌に日没以後を「明日」と言った例が見出されるわけで、注目に価しよう。

### 三、「入日見し今夜の月夜」

ところで、中大兄の「わたつみの豊旗雲に」の歌はどうであろうか。

実は、この中大兄の歌も、原文および訓み方に問題があり、現在二通りの訓法が行われている。すなわち、元暦本・類聚古集によると、

渡津海乃 豊旗雲<sup>レ</sup>尔 伊理比<sup>ニ</sup>弥<sup>ノ</sup>之 今夜乃月夜 清明己曾

となっており、第三句は「入日見し」と訓まれるが、流布本では「伊理比<sup>ニ</sup>沙<sup>ノ</sup>之」であって、「入日差し」と解される。紀州本に「伊理比<sup>ニ</sup>佐<sup>ノ</sup>之」となっているのも、後者の訓によるべきことを示すだろう。

このほか、西本願寺本をはじめ仙覚本の系統では「伊理比<sup>ニ</sup>祢<sup>ノ</sup>之」とある。これによると「入日寝し」と解されるが、当該歌の第三句としては通じにくいので、「沙<sup>ノ</sup>之」または「弥<sup>ノ</sup>之」の誤写と考えられる。

澤瀉久孝『万葉集注釈』では、第三句の原文を「伊理比<sup>ニ</sup>紗<sup>ノ</sup>之」と推定し、その「紗」が一方では「沙」と誤写され、一方では「弥」「祢」と写し誤られていったことを考えている。「入日差し」説による古典文学全集・古典集成などは、この澤瀉の考え方を踏まえている。

「紗」という、現存写本にはない幻の文字を想定した澤瀉の推理にも惹かれるが、もっとも古い写本の文字を尊重するという本文批判の定石に従うならば、元暦本などの「入日見し」を採用すべきだろう。古典文学大系、全註釈などに「入日見し」となっているのは、そうした考え方による。

右のように、第三句を「入日見し」と訓むか、「入日差し」とするか、判断が分かれており、結句の「清明己曾」の訓とともに末だに結着を見ない。

ところで、本稿の課題としてとりあげた「今夜」の意義用法から言うと、「入日見し今夜の月夜」は、一日の始まりを日没に置いているかそうでないか明らかでないが、「入日差し今夜の月夜」の方は、夕日のまださしている時点で、「今夜」と言うわけだから、日没を一日の始まりとは見ていないことになる。

つまり、中大兄皇子の斉明朝の歌にすでに新しい一日の観念が詠まれたも

のがあったことになるのだが、もし「入日見し今夜」が正しいならば古い観念で詠んだ可能性も残る。逆に言えば、古い観念で詠まれたとすればイリヒミシであってイリヒサシではありえないということである。

この一五番歌の「今夜」について、かつて亀井孝氏は、次のように記した。<sup>(注6)</sup>

…「イリヒサシ」の訓の伝統のふるさは、大いに考慮しなければならないとおもう。しかし、本文の漢字に関するかぎり、沙字が、すくなくとも、そのまゝ古くさかのぼることのできないことは明らかである。その點で、わたくしは、古本の彌字をとって考えてみる。この字をとって「イリヒミ(見)シ」と訓ずるたちは、すでに全註釈および日本古典文学大系によってとられているが、これらにあっては、作者の「こよひ」の語をもって言及するところを、すでに夜に入ってからその晩のこととし、そこから全体の解釈をほどこすというところみはなされていないようにおもわれる。もとより「入日見しこよひ」ということをもって入日を見たのを今夜の事実とすれば、それはをかしい。

ここにはごく小部分の引用にとどめたので、亀井氏が、右の文章の前に、古代人の用いる「今夜」について、来るべきその日の晩をひるまのうちに言うことはしなかったのではないかと考えていることも付け加えておかなければならない。さらに、源氏物語の若紫巻の例をあげ、日没のせまった時刻にそのあとにつづく夜をさして、心理的にはもはや身を夜の現在にうつし、「今夜」と歌ったことは考えられなくないが、慣用としては、夜に入ってからその晩をさして言うのが普通だったと思われることにも言及している。<sup>(注7)</sup>

亀井氏も記しているように、「沙」よりも「彌」の法が原字である可能性が高い。そして、「入り日見し今夜」ならば、夜になってその夜を指して「今夜」と詠んだと解するのが妥当である。

なお、「入日差し」と訓む澤瀉注釈や古典文学全集の訓について、ごく最近、山口佳紀氏が国語学的な視点から疑問を提示しているので、触れておこ

う。<sup>(注8)</sup>

山口氏によると、普通「連用中止法」と呼ばれるのは、先行の用言と後続の用言を並立させ、前者に後者と同じ構文的資格を持たせる用法である。これを連用形並立法と称するが、この場合、テンスは、先行する連用形の部分では決定されず、後続の動詞句で決定される。

雨隠り物思ふ時にほととぎす我が住む里に来鳴きとよもす (3782)

右の「雨隠り」は、「物思ふ」と並立して「時」を修飾し、「来鳴き」は「とよもす」と並立して「ほととぎす」の述語となっている。先行の連用形は叙述を中止したのでなく、後続の用言と並立しているのである。そのため、先行の動詞句は、後続の動詞句とテンス的に一致することになる。<sup>(注9)</sup>

このように連用形並立法を考えると、万葉集の用例のほとんどが無理なく理解されるのであるが、山口氏によると、有間皇子の、

磐代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む (141)

の歌と当面の中大兄の、

わたつみの豊旗雲に入日差し今夜の月夜清明己曾 (15)

の一首が問題になると言う。

有間皇子歌において、ヒキムスビは現在の動作、カヘリミルは未来の動作と考えるのが普通のようなのだが、前述のような連用形並立法のあり方からすると、そのような解釈は成り立たない。前半を現在の動作とすれば、原文「引結」をヒキムスブとして、いったん切らなければならない。ただし、それでは歌の流れが中断してまずいから、ヒキムスビと連用形に訓むのが正しいとすれば、カヘリミムと同じく、これも未来の動作と考えるべきである。

同様に、中大兄の15番歌についても、「入日差し」を現在の情景、「清明己曾」(これをサヤニテリコソ、アキラケクコソ、マサヤカニコソ、キヨクアケコソなど、いずれに訓むにしても)を未来の情景とするのが通説であるが、そうした解釈は、古代における連用形並立法にそぐわないと、山口氏は指摘する。<sup>(注10)</sup>「清明己曾」のテンスと「入日差し」のテンスとが一致するわけ

で、いずれも未来のことで願望の対象となる。

しかし、「入日差し」は、先にも触れたとおり流布本の文字面による訓であって、元暦本等では「入日見し」と訓まれる。流布本の文字によって一首全体を願望の対象とする、第三句の弛緩を感じさせるような作品と解するよりも、元暦本の「弥」によって「入日見し」と訓むことが、15番歌本来の形に近づく道であろう。

山口氏の連用形並立法に関する判断を、わたしは貴重なものとする。もちろん、芸術作品において、しばしば文法をはずれた特別な語法の見られることを承知しないわけではないが、連用形並立法の時制<sup>テンス</sup>に関しては、例外を生ずる余地は乏しいと思われる。

古写本による原文推定の定石からも、また、語学的な研究による語法解釈の上からも、「入日差し」は否定され、「入日見し」が採用されるようである。

先にも記したとおり、「入日差し今夜の月夜」であれば、日没後のことを日没以前に「今夜」と表現しているわけで、新しい一日の観念で詠まれていることになるが、「入日見し今夜」は、それと異なる。日没後に「今夜」と言っているので、一日の始まりを日没に置いたか、それとも日出に置いたかは明らかでない。

逆に言うと「入日見し今夜の月夜」の訓が15番歌の「今夜」に、古い観念による表現の可能性を回復させるのである。

#### 四、漏刻の設置と時間の観念

冒頭に引いたように、南方熊楠の「往古通用日の初め」では、日没を一日の始まりとする観念を天智朝以前のものとし、それが「遺習」となり、後世の作品中に残されたのではないかと考えられている。なぜ、天智朝以前に限りえたか、詳細は不明であるが、時計（漏刻）の製造とも関連しているのだろう。

日本書記によると、斉明六年五月「皇太子初めて漏刻を造る。民をして時

を知らしむ」とあり、また天智十年四月には「辛卯（25日）に、漏刻を新しき<sup>うてな</sup>台に置く。始めて候時を打つ、鐘鼓<sup>とどろか</sup>を動す。始めて漏刻を用ゐる。此の漏刻は、天皇の、皇太子にまします時に、始めて親ら製造れる所なり……」と見える。斉明六年に造られた漏刻が、天智十年に始めて使用され、鐘鼓を以て時刻が知らされたのである。

漏刻の使用によって正確な時刻を知ることができるようになる。橋本万平氏は前掲の斉明紀の記述について「傍証する何の文書もないので、どこまで信頼してよいか決定することはできない」<sup>(注11)</sup> と言い、また「奈良朝時代にはいると『大宝令』(718)に見られるように、現実に漏刻博士が居り、守辰丁が鐘鼓を打って時を知らせており、また時刻を記入した古文書が見られるから、この時代には時刻制度は確立していたと考えてよい」とも記している。

橋本論文には、時制について大宝令以前の資料は何もないと書かれているのだが、近く昭和56年12月18日に明日香の水落遺跡から、日本最古の漏刻(水時計)の遺跡が発見された。甘檀丘を西に見あげる飛鳥川右岸の地である。黒漆塗木箱、導水および排水用の木樋や銅管、楼状の建物など、遺跡から発掘された物やその位置などを総合的に判断して、木下正史氏は、この遺構を斉明紀に記された漏刻の遺構と考えるのが妥当だと言う。<sup>(注12)</sup>

中大兄皇子による製造の約20年前、唐では呂才によって四段式漏刻が発明され、多段式の水時計として技術の頂点に達したようである。明日香では水落遺跡の発掘成果を基礎とし、呂才の漏刻を参考に、実験的な復原研究を試みた結果、三ないし四段式の漏刻は驚くほど正確な時を刻んだという。

日本書記の記述によれば、中大兄の製造した漏刻を利用し、鐘鼓によって時を知らせたのは天智10年である。

おそらく、南方熊楠が「天智帝御宇前」の日本で日没を通用日の始まりとしていたと考えたのは、水時計の使用とかかわらせてのことだろう。漏刻の製作・使用は当時の最新・最高の技術を結集したものである。漏刻を実際に運用するには、これを正しく操作しうる管理者(漏刻博士)と相当な数のオ



ペレーター（守辰丁）を必須とする。したがって漏刻台の建設、時計装置の設置運営は、国家的なプロジェクトによって可能となる。木下氏も記しているように、時を告げる鼓や鐘が都に鳴り響いた時、人々は大きな驚きをもって耳を傾けたに違いない。

こうした水時計の利用が、時間の歴史を大きく転換させたはずである。昼の時間帯と夜の時間帯を異質なものと考えたり、日没を一日の始まりとする古い観念を脱して、夜昼を合わせて一日とし、かつ定時法の時制によって一日を12等分した正確な時刻を知るようになるためには、何よりも正確な時刻の計測が必要だからである。熊楠の推定は、これに見合っている。

いったい何時から新しい時の観念に立脚して歌は詠まれるようになったのか、資料が極端に乏しい古代のことだから、それを確定することは不可能であろうが、水時計の製作とその装置の運営などに先立って、新しい時の観念だけが普遍化することなどありえないだろう。それに加えて、前掲の人麻呂歌集の「朝妻山」の歌などの例を考え合わせると、熊楠の推定した天智朝よりもずっと以前から、新しい時の観念が大和の人々の間に広まっていたとは想像し難いと思う。

さらに、もう一つ。ここで注目したいのは、「夜はも……昼はも……」という対句の表現である。

やすみしし わが大君の 恐きや み陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜は  
も 夜のことごと 昼はも 日のことごと ねのみを泣きつつありてや  
ももしきの 大宮人は 去き別れなむ (155) 額田王・天智10年

やすみしし 我が大君 高光る 日の皇子 ひさかたの 天つ宮に 神な  
がら 神といませば そこをしも あやに恐み 昼はも 日のことごと  
夜はも 夜のことごと 臥し居嘆けど 飽き足らぬかも (204)

置始東人・文武三年

……我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋のうちに 昼はも うらさ  
び暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに…… (210)

柿本人麻呂・持統朝後半か文武朝

……我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋のうちに 昼は うらさび  
暮らし 夜は 息づき明かし 嘆けども せむすべ知らに…… (213) 同上

上に掲げたように、額田王の天智天皇挽歌では「夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと」と、夜を先に、昼を後にして詠まれているが、文武3年の弓削皇子挽歌では、「昼はも～夜はも～」となり、柿本人麻呂の亡妻挽歌でも、「昼は(も)～夜は(も)～」の順になっている。つまり、持統天皇時代を境にして、一日を昼と夜に分けて言う対句の順序が逆転している。これも、単なる偶然ではなく、日没を一日の始まりと見るか、そうでないか、ということにかかわりがあると思われる。

念のために、奈良時代以後の例も掲出しておこう。

……その鳥の片恋のみに 昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと  
立ちて居て 思ひそ 我がする 逢はぬ子故に (372) 山部赤人

……老いにてある 我が身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも 嘆か  
ひくらし 夜はも 息づき明かし 年長く 病みし渡れば…… (897)

山上憶良

……うち折らむ しこのしこ手を 指しかへて 寝らむ君故 あかねさす  
昼はしみらに ぬばたまの 夜はすがらに 此の床の ひしと鳴るまで  
嘆きつるかも (3270)

……たまだすき 掛けぬ時なく 吾が念へる 妹にし逢はねば あかねさ  
す 昼はしみに むばたまの 夜はすがらに 眠も寝ずに 妹に恋ふる  
に 生けるすべなし (3297)

あかねさす 昼はもの思ひ むばたまの 夜はすがらに ねのみし泣かゆ  
(3731) 中臣宅守

……あかねさす 昼はしめに あしひきの 八丘飛び越え むばたまの  
夜はすがらに 暁の 月に向かひて 行きがへり 鳴き響むれど 何か飽  
き足らむ (4166) 大伴家持 天平勝宝二年

人麻呂の時代以後の対句は「昼は（も）～～夜は（も）～～」がすべてで、  
「夜は（も）～～昼は（も）～～」の形が無い。これには理由のあることと思  
われる。掲出した歌の分脈によっているのではなく、一日全体を表現する時  
に、こうした形が利用されたのは、一日の観念に関わるのであろう。額田王  
の天智挽歌にのみ「夜はも～～昼はも～～」になっているのは、古い観念の  
投影ではないか。

なお、巻四の岡本天皇御製に「……吾が恋ふる、君にしあらねば 昼は 日  
の暮るまで 夜は明るきはみ 思ひつつ 寝もねかてにと 明かしつら  
くも 長き此の夜を」(485) にも「昼は～～夜は～～」の対句を見るが、す  
でに指摘されているように、<sup>(注13)</sup>「神代より あれ継ぎ来れば」という表現を  
齊明天皇時代のものと見ることに疑問が持たれるし、反歌二首が添えられて  
いるのも、この長歌の成立時期に不審を抱かせる。当面の課題に対し確かな  
資料とすることはできないので、付記するにとどめる。

漏刻により正確な時刻が知られるようになるとともに、我が国における一  
日の観念にも変化が生じたであろう。それが右のような対句にもあらわれて  
いると思われる。人麻呂歌集には古い「明日」の用法を残しているが、人麻

呂は、その作歌においていち早く反応を示した。

とすると、一五番歌の「入日見し今夜」も古い一日の観念にもとづく「今夜」であったと考えるほうが正しいかもしれない。なお明確でない所があるが、熊楠の推定にも相応の根拠があると言うべきだろう。

もう一つ、付記すべきは、天智挽歌に見られる「きぞ」の例についてである。

天皇の崩りましし時に<sup>をみなめ</sup>婦女の作る歌一首

うつせみし 神にあへねば 離り居て 朝嘆く君 放り居て 吾が恋ふる  
君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば 脱く時もなく 吾が恋ふる  
君そきその夜 夢に見えつる (150)

この歌の末尾近くに「きその夜」と見えるのは昨夜のことをあらわす。東歌にも、

うちひさつ美夜能瀬川の貌花の恋ひてか寝らむき<sup>き</sup>も今夜も (3505)

とある。そのほかに、

昨夜こそは児らとき寝しか雲の上ゆ鳴き行く鶴の間遠く思ほゆ (3522)

おして否と稲は春かねど波の穂のいたぶらしもよ昨夜独り寝て (3550)

比多<sup>わかめ</sup>瀉の磯の若布の立ち乱え我をか待つなも昨夜も今夜も (3563)

の三例が同じく東歌にあり、

雨づつみ常する君はぬばたまのきその夜の雨にこりにけむかも (519)

大伴女郎

ぬばたまの昨夜はかへしつ今夜さへ吾を還すな路のながてを (781) 大伴家持  
の二例は、巻四の相聞歌中に見える。

この「きそ」の語は、記紀歌謡の中にはない。おそらくそれと類縁を有すると思われる「こそ」の形が允恭記歌謡に見られる。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走せ 下訪ひに 我が訪ふ妹を  
下泣きに 我が泣く妻を 今夜こそは 安く肌触れ (78歌)

コゾ (今夜) とキソ (昨夜) とに見られるソあるいはゾが、夜に関わる語

であり、コとキとはそれぞれコヨヒやキノフのコ・キに等しいと思われる。それはともかく、コゾもキソも八代集には見られないし、コゾの方は万葉集にも無いから、古語であったと考えられる。万葉集ではコゾの代りにコヨヒがもっぱら使われており、キソとコヨヒと対照して歌われることが多い。

そうしたことから、あえて想像するならば、キソとコゾとは、夜と昼とを異質な時間として意識していた時代の名残りとも言うべき語ではなかったかと思う。

なお問題を多く残すが、すくなくとも150番歌の「キソ」の例によって、前夜をキソとする新しい一日の観念が天智朝に生じ、すでに一般化していたとすることはできないのである。

## 注

- (1)西宮一民『古事記』の訓による。
- (2)南方熊楠全集第四卷
- (3)「上代の人々の一日に対する考え方について」(武智雅一先生退官記念国語国文学論集) および「古代語『こよひ』の意味用法をめぐって」(『人文研究』第三十八巻第三分冊)
- (4)「古代時間表現の一問題——古事記覚書——」(『論集上代文学』第六冊)
- (5)稲岡『万葉表記論』538ページ以下。
- (6)亀井孝「万葉集第十五番の歌『渡津海乃……清明己曾』のよみについての私見」(『万葉』34号)
- (7)注6に同じ
- (8)「万葉集における時制の文の構造」(『国文学』昭和63年1月)
- (9)山口論文には「<動詞連用形>は客体的概念を表すが、<動詞<sup>プラス</sup> + テンス>は単なる客体的概念ではない。従って、両者が並立関係に立つ時、前者は後者全体とは並立できない。そのため、後者の動詞のみと関係を構成し、テンスは後から付け加わる形になる」という。
- (10)注8論文の113ページ。吉永登『万葉——通説を疑う——』にも関連した発言があった。
- (11)「万葉時代の暦と時制」(有精堂『万葉集講座』第二巻)
- (12)「飛鳥の水時計」(『発掘——奈良——』)
- (13)曾倉岑「万葉集巻四『岡本天皇御製一首』」(『青山語文』八) 稲岡「反歌史溯

源」(『古代史論叢』上)、など。

## 討議要旨

武尾和彦氏より、巻二の150番に出る「きそ」という言葉は、一昨夜ではなく、きのうの晩のことではないか、また巻四の619番では夜が先で昼が後になっている、すると天武朝以前、持統朝という所で線を切るのは、今ひとつはつきりとしなくなるのではないか、との質問があった。

これに対する発表者の解答は、次のようなものであった。

150番に出て来る「きそ」という語をどういう風に考えたら良いのか、私も気にならないではなかったのですが、「きそ」というのを本当に「ゆうべ」というのと同じに考えて良いのかどうか。それは言葉が違うように、やはりもとの意味は違うのではないかと思います。「きそ」という語は「昨夜」と解釈されてきていますが、原文は「きそ」と仮名で書いてあります。ていねいな註釈書では、「きそ」の原義の説明などに難渋しているようです。「きそ」という言葉があるけれども、その意味が分り難いと私は思うので、発表では触れなかったわけです。619番の方の例ですが、御指摘のようにこれは夜が先でなければ、前の句とのつづきぐあいとうまくいきません。ただ古い意識で歌われたものが後になって出て来ることがあるのも当然のことですね。ずっと新しい所では「平家物語」などにも出ているわけです。ですから古い形が完全になくなってしまっているわけではありません。問題は「万葉集」の中で古い所を確かめていって、ただ分らないというのではなく、整理をすることができる所があるのではないか、ということです。これは時制の問題ですから、やはり時刻やこよみなどが整備普及されるのと歩調を合せて変っていくはずのものだと思います。「万葉集」で確かめていくと、天武朝には出てくるし、古い所では中大兄の歌なども古い意識で詠まれたと考えられなくもない。そういうことを一応申し上げたわけです。そしてその補助として、対句などが変わっていく例をあげました。(編者注 本会議録では、この問題をふ

くみこんで、発表者は記されている)

糸川光樹氏より、南方熊楠の奥さんが、一昨夜のことを「キニョーの晩」と言ったのは、地域的な違いではないか、「万葉集」の場合も、この地域的な違いということを、考慮に入れないで良いか、との質問があった。発表者は、人麻呂は中央において、中央の思想といったものを摂取して、歌を詠んでいる、時代の変化に敏感に反応しているように思う、その人麻呂の歌に「明日」というのが、古い使い方が出てくる点を重視したいと思うので、地域差という点は、一応度外視して考えた、との答えがあった。